

2026年度

日中青年会議

活動報告書

2026年7月26日～7月31日



代表挨拶

日中青年会議 運営日本チーム リージョナルコーディネーター

松尾 美結

第18回日中青年会議を今年度も開催し、日本・中国本土・香港・台湾の四地域から総勢43名の参加者を迎えることができたことを、心より嬉しく思います。また今年度の会議は、国際的な状況を鑑みて、オンラインで取り行われました。

日中関係の対立が特に目立つようになった今年度は、この会議にとっても極めて難しい一年でした。私自身香港に身を置き生活をする中で、政治的な緊張が高まるに伴い日中間の交流の機会も著しく減少していることを肌で感じてきました。国際関係の悪化が、人々の距離をいとも簡単に、そして確実に遠ざけてしまうことを目の当たりにし、ショックを受けました。日中青年会議が届けたいものは何か。教育的な場がどこまで対話の場を守れるのか。私たち運営委員は何を信じてこの会議をつくるのか。運営委員一同、何度も何度も話し合いを重ね、これらの問いにかつてないほど向き合いました。

United World Collegeの学生と日中青年会議の過去参加者で構成される運営チームは、『教育は、より平和で、持続可能な未来を拓くための「原動力」である』と信じています。分断の広がる社会において、学生として今できること、すべきこととは何か。学生が主体となり運営するこの会議において、学生が背負える責任の限界も浮き彫りになる中、それでも私たちは、この会議が届ける対話の場が、参加者同士を繋ぎ、複雑化する国際関係で「ひと」と「ひと」を繋ぎ止める「力」になると強く信じています。

ソーシャルメディアが大きな影響力を持ち、人工知能が用意された「答え」を簡単に教えてくれる現代。育った価値観や文化の違う個人と時間をかけて対話することは敬遠されてしまうものかもしれません。しかし単純化された対立構図で物事や人々を決めてしまうのではなく、一人一人の声に耳を傾け、違うことを面白がり、自分の見てきた世界に他の色がさす瞬間を味わってほしい。プログラムがたった6日間であろうとも、その経験は必ず個人の中に、長く、確かに、宿り続けるはずです。

最後に、逆境の中でも、温かな優しさと明るいエネルギーに満ちた対話の場を今年度も提供することができたのは、多くの方々の温かいご支援、応援と、ご協力のおかげです。運営を通して、どれだけの人にこの会議が想われ、支えられ、熱い思いを持って18年間受け継がれてきたのかを一層痛感しました。改めまして、財団の皆様をはじめ、これまで私たちを支えてくださったすべての皆さまに心より御礼申し上げます。今後とも、末永いご支援とご指導を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

目次

1. はじめに		4
2. 日中青年会議とは		5
3. 今年度のテーマ		7
4. 運営計画		8
5. スケジュール		10
6. オンライン開催における工夫		11
7. プログラム内容		13
8. 収支報告		18
9. おわりに		19

はじめに

概要

事業名 : 2026年度 日中青年会議 / Sino-Japan Youth Conference 2026

事業開催期間 : 2026年7月26日～2026年7月31日

事業実施場所 : オンライン

日本チーム運営委員宿泊場所 : 国立オリンピック記念青少年総合センター

事業主催 : 日中青年会議委員会

創設 : 2009年

創設者 : 古川知志雄 横浜国立大学 国際社会科学研究科・経済学部 准教授

協力団体

助成金・寄付(敬称略):

公益財団法人 双日国際交流財団

公益財団法人 東華教育文化交流財団

参加者

日中青年会議委員会 運営 : 25名

(日本 8名 中国本土 7名 香港 5名 台湾 5名)

参加者: 43名

(日本 19名 中国本土 14名 香港 4名 台湾 6名)

日中青年会議とは

沿革

日中青年会議は、2009年に、当時 UWC 香港校 (LPC) の学生であった古川知志雄ら高校生有志によって設立されました。「かつて政冷経熱と言われた日中間の信頼基盤の弱さを克服する」ことを目的に、日中の架け橋となることを目指して始まったのが今の日中青年会議です。

UWCとは、世界各国から選抜された高校生を受け入れ、教育を通じて国際感覚豊かな人材を養成することを目的とする国際的な民間教育機関です。80カ国以上の国から集まる生徒とともに、平和や環境保護、人権等の問題に対して多くの議論が行われます。現在までに、イギリス、カナダ、イタリア、アメリカ、香港、ノルウェー、オランダ、ドイツ、日本等、世界各地に18のカレッジ(高校)が開校されています。2022年、2024年と、二度もノーベル平和賞にノミネートされるなど(*1)、平和に対する貢献が高く評価されてきました。

日中青年会議は、2009年設立時から、新型コロナウイルスによるオンラインでの実施期間も挟みながら18年間途切れることなく、日中相互理解の機会を中高生に提供し続けています。



*1 参考：UWC

<https://www.lpcuwc.edu.hk/post/uwc-nominated-for-the-nobel-peace-prize>

会議理念

批判的思考力と相互尊重を兼ね備えた、
建設的な未来を共に創る日中の親善大使を育成する。

批判的思考力

1. 自己を振り返る力

当会議では、他者の意見に対して批判的になるだけでなく、自らの主張や価値観に対しても疑問を持ち、客観的に見直すことのできる場を提供しています。

2. 異なる意見を受け入れる柔軟な思考の実践

私たちは柔軟性を持って相手の視点に立つ能力を重視しており、ディスカッションを通じて、自らの考えを大切にしながらも相手の立場や文化的背景を理解しようとする姿勢を奨励しています。

3. 情報に対する批判的視点

日中間の異なる価値観を尊重しながらお互いに歩み寄るために、普段から私たちが受け取る情報に対して批判的に見る能力を育成します。

相互尊重

1. 建設的な未来への対話の場の提供

会議を通じて参加者は、多様な意見や価値観に触れながら、相互理解を実現していきます。異なる地域から集まった仲間たちと寝食を共にすることで、参加者は、他者を異国の人間としてではなく、個人として見るできるようになります。この視点の変化は、政治的・国民的なステレオタイプを取り除き、真の意味での相互尊重をもたらします。

2. 異なる文化・価値観の学び

本会議では、中国本土・台湾・香港の様々な文化や歴史に触れることができます。様々なセッションを通して各地域の理解を深めるのはもちろんのこと、実際にその文化で育った友人に話を聞くことで、それらをより身近に感じることができます。また、開催地である香港の文化についても、様々な体験を通して深く学びます。

今年度のテーマ

Bridging ~Conversation Beyond Borders~

今年の会議全体を貫くメインテーマとして、私たちは「Bridging — Conversation Beyond Borders（境界を越え、対話を）—」を掲げました。会議中の各セッションはこのテーマに沿って設計されました。多様化と断絶が進む現代において、私たちがなぜこのテーマを選び、いかなる思いを込めてプログラムを設計したのか、その背景と意図を以下にお伝えします。

現代社会における分断と「境界」の課題意識

今日、多様化が進む一方で、社会の至る所に新たな分断が生じています。文化や価値観の違いを受容できない寛容さの欠如はもちろん、現代ならではの構造も影響しています。特にソーシャルメディアのアルゴリズムが引き起こす「エコチェンバー現象」は、自らの声が大多数であるかのような錯覚を生み、異なる立場や意見を持つ他者に耳を傾けることを困難にさせています。さらに、緊迫する国際関係が国家レベルにとどまらず個人間の交流にまで影を落とし、人々の間の隔たりをより強く固定化させているのが現状です。こうした時代背景や社会のあり方に深く目を向け、日常に潜む壁の存在に立ち返る必要性から本テーマを設定しました。

対話を通じた「Bridging（架け橋）」の探究

本テーマにおける「境界」とは、土地や制度の区切りだけではなく、私たちが無意識下で人との間に引いている心理的な距離感、思い込み、偏見、そして対話を阻む「見えない壁」のことです。「Bridging」という言葉には、自分自身が内面に抱く偏見や他者への線引きに自ら気づき、対話を通じてその境界線を融解させていきたいという願いが込められています。違いを理由に容易に築かれてしまう壁に対し、私たちは「対話の力」を信じ、互いを繋ぐ確かな橋を架けていきたいと願っています。また、橋は一方から伸ばすだけでは途中で崩れてしまうように、真の対話と理解の実現には、双方からの歩み寄りと継続的な努力が不可欠であるという認識を共有しました。

繋がりへの再発見と持続的な関係性の構築

これらの背景と思いのもと、本会議の全てのセッションは「私たちはどのように繋がっているのか」「自他の違いをどのように深く理解し合えるのか」を多角的に探究できるよう設計されています。違いを排斥するのではなく包摂し、対話によって互いの距離を縮める体験を届けることを目指しました。対話を通じてここで芽生えた相互理解と強い結びつきが、一過性の経験で終わることなく、今後の活動や将来にわたって長く残り続ける持続的な関係性へとつながることを期待しています。

運営計画

オーガナイザーは、日本チーム内で財務・広報・参加者対応といった役割を担うと同時に、会議に向けて各自がセッション作りや全体の運営を担当します。

オーガナイザー選考

オーガナイザー（運営委員）は本会議の過去参加者とUWC生を対象に募集し、エッセイ、セッション作り、面接を通して4名の新たなオーガナイザーを選考しました。選考基準としては、本会議へかける情熱、財務や広報などの仕事をする能力の有無、実際の会議時にオーガナイザーとして参加者にどのように対応するか、セッションの運営能力などが挙げられます。面接には現役のオーガナイザー二人以上が参加し、最終的な結果は全体の話し合いによって決定されました。

参加者選考

参加者選考は、書類選考と面接選考の二段階で行いました。どちらの選考においても、会議に参加してほしい参加者像を運営委員で話し合い明確にすることで公平性を保ち、応募内容を丁寧に検討した上で参加者を選考しました。

書類選考では、日本語と英語のエッセイに加えて、会議への意気込みも含めた自己紹介動画を応募書類に含めることで、オンラインでより必要とされる熱意と自発性、日中関係への関心、表現力、論理的思考力といった能力を評価しました。

面接選考では、日本語と英語での言語運用能力や論理的な思考かつ説明能力を評価するとともに、本会議の趣旨と目的に相応しい人物像であるかを評価しました。最終的な合格者に際しては、運営委員で複数の視点からの話し合いを重ねて総合的に判断しました。

運営スケジュール

10月

オーガナイザー選考

12月

各団体への助成金申請
広報活動

2月

会議企画 開始

4月

募集要項公開
セッション準備開始

5月

一次書類選考
一次シミュレーション

6月

二次面接選考
合格発表

7月

二次シミュレーション
参加者オリエンテーション
会議本番

セッション準備

異なる地域からの4~5人程度のオーガナイザーで、会議開催の4ヶ月以上前から協力し、それぞれ歴史、文化、平和構築、プロジェクト、OCトークのセッションの企画を行いました。

「参加者にどのようなメッセージを届けたいのか?」「テーマに沿ったセッションとはなにか」という問いについて幾度もディスカッションを重ねながら、質の高いセッションを届けられるように努力しました。また、さらに良いセッションを届けられるよう、以前同じセッションを担当した運営2年目のオーガナイザーが運営1年目のオーガナイザーを監督する形で企画を行いました。

この際、政治情勢に対しては細心の注意を払いながら、セッション内容を構想しました。セッションの精度と安全性を高めるため、リージョナルコーディネーターと合同でのミーティングも行われ、セッション内容の推敲が行われました。6月下旬と7月上旬にオンラインでシミュレーションを行い、全てのセッションの内容を実際に再現し、リージョナルコーディネーターによるフィードバックを受ける機会を設けました。この内容をもとに議論を重ね、セッション内容を改善しました。

また、開催前に2日間かけて、全セッションのシミュレーションを他のオーガナイザーを参加者に見立てながら行いました。オーガナイザーからの活発な質疑応答やフィードバックを通して、セッション準備の最後の仕上げをすると同時に、ファシリテーションにあたっての疑問点の解消などを行いました。これらの全4回に渡るセッション内容の外部からの確認を通して、安全かつ質の高いセッションが、スケジュールに余裕を持って作成されました。

参加者オリエンテーション

会議の開催に先立ち、参加者を対象としたオリエンテーションを実施しました。

オリエンテーションでは、まず会議におけるグラウンドルールや、英語をはじめとする参加者へのサポート体制について説明しました。また、会議で使用するオンラインツールについても、参加者全員で操作方法や使用方法を確認しました。本会議には、四地域からさまざまなバックグラウンドを持つ高校生が参加し、さらに複数の参加者にとっては初めての全て英語の環境となります。そのため、参加者が安心して6日間の会議に参加できるよう、事前に会議の進め方や必要なツールについて確認する機会を設定しました。また、後半には4~5名のグループに分かれ、他の参加者や運営委員と交流する時間を設けました。自己紹介やアイスブレイクを通じて、今後1週間にわたって共に会議に参加するメンバーとの交流を深めました。

参加者が会議の進め方や必要なツールについて理解するとともに、参加者同士が交流を深め、これから始まる6日間の会議に向けて安心して参加するための準備を整える機会となりました。

スケジュール

7月24、25日は、運営委員による開催準備期間に当てられ、それぞれが担当するセッションのリハーサルを行い、最終調整をしました。

本会議は7月26日から7月31日の6日間行われました。本会議は、主に4つの大きなセッションと各地域のオーガナイザーによる地域紹介、そして様々なアクティビティによって構成されています。さらに、会議中に主にディスカッションなどを行う、5~6名の参加者で構成される「バディグループ」がポイント制で競い合いながらアクティビティを行う時間や、トピックごとにブレイクアウトルームを設定し、自由に人々が入り出しながら交流を深める時間を多くプログラムに取り入れ、オンラインという空間でも参加者がより距離を縮められる工程を意識しました。

GMT+8	Day 1 July 26th	Day 2 July 27th	Day 3 July 28th	Day 4 July 29th	Day 5 July 30th	Day 6 July 31st
08:30 - 9:00	Opening + Ice Breaking (1.5hr)		BG Comp(1.5)			Get Ready
09:00 - 09:30		History (1.5)		Project (2)	Project (2)	
09:30 - 10:00			CM OC Talk (1)			Closing Ceremony
10:00 - 10:30	Theme					
10:30 - 11:00		Break				
11:00-12:00	Lunch					
12:00-12:30	Tone Setting	History (1.5)	Peacebuilding (2.5)	BG Comp(1.5)	Break	
12:30-13:00					TW OC Talk (1)	
13:00-13:30	Culture (3)	Break		Break	Reflection of sessions	
13:30-14:00						
14:00-14:30		Project (1)		Regional Meeting	Roundtable Discussion	
14:30-15:00			Regional Meeting			
15:00-15:30		Free Chatting Space		Regional Meeting	Free Chatting Space	
15:30-16:00			Free Chatting Space			
16:00-17:00	Free Chatting Space	Free Chatting Space		Free Chatting Space	Free Chatting Space	

オンライン開催における工夫

今年度はオンライン開催となった中で、参加者が主体的に学びを深め、対面開催と同様に長く続く交流を提供できるよう、プログラムを通して様々な工夫を施しました。

1. Zoom, Mentimeter, 及びKahootの使用

オンライン会議の媒体として、四地域が共通で使用でき、かつ参加者に最も馴染みのあるZoomを主に使用しました。双方向コミュニケーションを実現するため、会議内では、Zoomチャット機能を活用して参加者が気軽にコメントできる環境を整え、MentimeterやKahootといったエンターテインメント要素を含む媒体も使用しました。

また、英語の言語サポートが必要な参加者に対してはZoomのチャットルームを作り、セッションの内容や難しい単語を日本語にして伝えるなど、言語の壁がありながらもできる限り多くの学びを会議中に得られるようにサポートを行いました。さらに、会議期間中、会議時間外でも参加者間や運営委員との交流を深めるために、Microsoft Teamsを活用してバディグループ内または全体で会話ができる場を提供しました。

対面とは異なり直接のコミュニケーションが難しい場面もありましたが、上記の媒体を活用するなど工夫を凝らし、参加者の学びと交流をサポートしました。

2. バディグループの設定

全四地域の運営委員と参加者が交流を深められるよう、3~4地域の参加者と運営委員で構成される5~6名のBuddy Group（通称BG）を編成しました。各セッションでのディスカッションや後述のBGコンペティションはそれぞれのBG内で行われました。6日間毎日顔を合わせたBG内では最も仲が深まり、早い段階より参加者同士が連絡先を交換し合うなどの様子も見られました。

また、会議終了後には各BGの運営委員より各参加者へメッセージカードを作成し、印刷したものを修了証とともに各参加者の自宅へ郵送しました。オンライン開催でも何か形に残るものを参加者に届け、会議での学びや時間を後々も思い出してほしいという運営委員の想いから実現した企画でした。



3. バディグループ対抗戦

5~6名の参加者と2~3名の運営委員で四地域出身者を平等に含んで構成されるBuddy Group(BG)において、セッション内の議論だけではなく、横のつながりをさらに強めるため、BGコンペティションというイベントを2日間に分けて計3時間実施しました。

具体的には、Kahootを用いたクイズ大会や日中の歴史に関するワークショップを行い、チームワークなどの観点から得点化しました。また、セッション中にZoom上で意見を述べた回数もBGコンペティションの得点に反映される仕組みとし、BG内の結束を深めると同時に、コミュニケーションを増やし、参加者がより打ち解け、話しやすい雰囲気を醸成しました。

4. 地域別ミーティングとオープンチャットスペース

地域別ミーティングは、基本的に各地域ごとに1日の最後に15~30分ほど開催しました。日本の地域別ミーティングでは、参加者同士が交流できる場を設けるとともに、ブレイクアウトルームを用いて参加者の率直なフィードバックやを聞き取ったり、セッション内容や英語でのコミュニケーション能力についての不安など個別に聞くなどし、翌日以降の運営に日々反映できるよう努めました。

また、オープンチャットスペースは4地域の参加者が混ざって交流する時間とし、「音楽」「食」「映画」などのトピックごとにブレイクアウトルームをzoom上で作成し、参加者は自由に会話に加わりながら仲を深めました。オーガナイザーが進行役を担うのではなく参加者同士で会話を進める形をとることで、自主的な対話や議論が生まれました。

5. 会議終了後の対面での交流会

本会議終了後、東京都内のレンタルルームを使用し、希望者を対象とした参加者と運営委員の交流会を開催しました。オンラインで6日間仲を深めた後に対面で再会し、直接言葉を交わすことができたことを喜ぶ声が多く聞かれました。また、参加者同士の交流も深まり、和やかな雰囲気の中で親睦を深める機会となりました。



プログラム内容

トーンセッティング / Tone Setting

このセッションでは、プログラムを始めるにあたって、注意すべき点を確認しグラウンドルールの設定を行いました。地域によって異なる文化的・歴史的教育が行われていること、また政治的に極めて敏感なトピックが存在することを重点的に伝え、互いへの尊重と敬意を持ち、多様な意見を寛容に受け止める態度を常に持つことを繰り返し確認しました。

他にも、参加者によって異なる英語でのコミュニケーション能力を持つことや、オンラインであることを踏まえて、リアクション機能やチャット機能を使ってアクティブに他の参加者の発言や発表に反応することなど、参加者全員にとって居心地の良い、発言しやすい環境づくりをすることを願いました。

想定されうる会議中の対立などについては、運営委員によるデモンストレーションを通して具体的に伝え、どのような姿勢で議論に望んで欲しいのかを明確に示しました。

セッション

様々なアクティビティの中でも本会議の中核を担うのが、歴史、文化、平和構築、OCトークの4つのセッションです。それぞれが会議のテーマである「Bridging ~Conversation Beyond Borders~」を主軸に、セッションごとに色を出しつつ、テーマとの繋がりもしっかりと捉えられるよう設計されました。

歴史 / History

歴史セッションでは、Perspective(視点)に焦点を当て、午前/午後の二つにセッションを分けて様々なアクティビティを行いました。初めにトーンセッティングを行い、異なる価値観や意見を尊重し合える、心理的に安全な場を作りました。

午前のパートではまず、歴史とは何か、なぜ歴史を私たちは学ぶのかについてMentimeterを使用しながら意見を共有した後、セッション内で取り上げる歴史的事象について共通の知識/理解を得るために15の歴史的事象について説明を行い、Kahootを使用して内容を確認しました。その後、歴史的出来事が地域ごとにどのように異なっているかについて考察するため、実際に各地域で使われている歴史教科書の日中戦争に関する項目を比較する活動を行いました。結果、同じ歴史でも歴史は選択肢や解釈の違いによって議論が生まれること、私たちが同じ歴史的出来事でも異なる視点から見る理由とその重要性を学びました。会議全体のリフレクションパートでも「印象に残った」という参加者の声が多いパートとなりました。

午後のパートでは歴史にメディアの観点を組み合わせたセッションを行いました。最初に、歴史は過去のニュースであり、歴史になる過程で様々な観点から書かれた情報/ニュースの組み合わせからかかっていることを参考に、現代のニュースが歴史となった際に、一番記述に影響を与えるメディア媒体は何かについてMentimeterを使用しながら考えました。その後、複数のニュースの見出しを比較し、どのような背景情報が作用しているのかを議論しました。また、その後運営委員によって作成された4つの史資料をもとに新聞記事を作成する活動をグループで行い、BGや視点による歴史の切り取り方の違いを体感しました。

最後に、メディアのアルゴリズムがどのように私たちの歴史理解や身の回りのメディアに影響を与えているかを考えました。各地域のSNSでの「戦争の終結」の検索結果を共有し、普段見ているメディアにはアルゴリズムが働き、傾向性が見られることを実感しました。

文化 / Culture

文化セッションでは、偏見や固定観念とそれらの背景に着目して、今年度のテーマである「Bridging」に対する理解を深めました。

初めに、文化とは何か、4地域の文化の相違点について考え、文化の違いによる偏見や誤解について具体的な例を活用しながら背景を話し合いました。

続いて、固定観念と一般化志向に関して、それらがエンターテインメントやジョークとして使われることは許容されるのか、また内容が肯定的であれば許容されるのか、話し合いを通じて相互理解を深めました。

最後に、異なる種類の偏見や固定観念について、実際の事例（ケーススタディ）を通じて考え、自らの言動や見聞きした経験を振り返りました。文化セッションを通じて話し合ったことを踏まえて、偏見を減らすための啓発活動としてのポスター作成を行いました。

文化の相違から発生する偏見や固定観念について、4地域からの参加者と話し合いながら理解を深め、それらを乗り越えた相互関係の構築を目指す機会を提供しました。また今年度は、オンラインでの開催であることを最大限に活用して、チャット欄の活性化、ブレイクアウトルームでのグループ活動、各自の家にある物からの文化紹介などを実践しました。



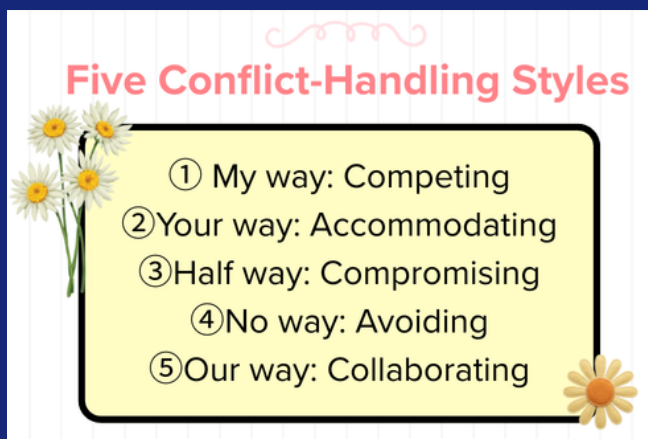
平和構築 / Peace Building

平和構築セッションでは、本会議の核となる「平和」という概念について、アクティビティと議論を軸に3時間をかけて学びを深めました。

冒頭では、参加者一人ひとりに自分なりの「平和」の定義を言語化してもらい、セッションを通してその定義がどう変化していくかを自ら体験できる構成としました。知識を抽象的に受け取るのではなく、実感を伴うものとして獲得し深めてほしいという考えから、参加者が能動的に学べるよう、各パートの学びが次へとつながる流れを意識して設計しています。

まず、移行期正義がいかにして積極的平和の構築につながりうるのかを議論しました。続いて、対立への対処における五つの型を扱い、自らの目的の達成と相手との関係の維持を両立させるために、状況に応じて対応策を使い分けることの重要性を確認しました。いずれの場面にも議論とアクティビティを組み込み、参加者が手を動かし言葉を交わしながら理解を深められるようにしています。

平和を遠い抽象的概念としてではなく、身近な問題として捉え直し、深く考える機会を提供したことで、参加者は平和構築の視点から物事を捉える力を養いました。また、自ら「平和」を定義したことにより、世界の問題を自分ごととして捉えられるようになりました。



OCトーク / OC Talk

OC talkは各セッション一時間で行われ、4地域のOCがそれぞれの地域の文化を紹介し、それに関わる課題を説明するなどして参加者の文化理解に努めました。

日本チームによるOC talkでは、「場」や「空間」に対する日本特有の価値観や慣習を主題にしたセッションを行いました。導入として、それぞれの部屋や机を例に、お互いがいかに異なるインテリアを持ち、それぞれの考え方や生活習慣が普段暮らす場所に現れるか、という視点からセッションの本題へと展開しました。

冒頭では、日本の伝統的な家屋で用いられる玄関や畳、神社に入る前の手水や相撲の試合前のお清めなどの例を元に、日本文化にみられる、特定の「場」を他の場所と区別し、清める考え方や習慣を説明しました。参加者のインタラクティブな交流を促進するために、Zoomのチャット欄で参加者同士の意見を共有する方法や、挙手制での意見の発表、バディグループ内でのディスカッションなどを用いました。

中国本土は自分のペースで街の散策を楽しむ近年若者の間で人気のCity Walk、香港はDim sum（中国茶と一緒に小皿料理を楽しむ食文化）、そして台湾は言語とアイデンティティの関係および台湾の歴史的な社会の変遷をテーマとしてセッションを行いました。

これらのセッションを通して、参加者は各地域の文化や慣習に対する理解を深め、それに関わる現代の課題について、他の参加者と議論を行いました。

テーマ “Bridging~Conversation Beyond Borders~”

テーマセッション /Bridging ~Conversations Beyond Borders~

初日に行われたテーマセッションは、プログラムの核となる今年度のテーマ「Bridging ~Conversation Beyond Borders~」について、テーマ設定の背景を知り、会議を始めるにあたってどのような学びを得るのか具体的なイメージを持って望むために設計されました。

はじめに、“Borders”という言葉について、単なる物理的な境界という理解に留まらず、文化の違い、個人的価値観の違いや、それらの多様さを受け入れようとしめない姿勢が無意識のうちにも境界を作り出してしまうことがあるというところまで認識を促しました。

さらに、私たちのものの見方に大きな影響力を持っているソーシャルメディアがアルゴリズムによって自らの声が大多数の意見であるかのように錯覚させるエコチェンバー現象を作り出すことに触れました。これによって、現代では異なる意見を持つ人の意見に真摯に耳を傾けることが一層難しくなっていると言えるのではないかと問いました。

加えて現在の国際関係にも目を向け、国家間の関係が個人間の交流や関わり方に影響を及ぼし、関係悪化に伴って個人間の「境界線」がより強固なものになってしまう点も認識しました。

その後、それでも私たちは対話の力を信じてここにいること、そしてここで生まれる関係が長く強く残り続けて欲しいという運営の願いを改めて伝え、「違い」を下に簡単に作り上げられてしまう「境界」の間に橋を架けよう、と呼びかけました。最後に、橋を造る際には双方から組み立てられる必要があり、一方からでは途中で崩れてしまうことを指摘し、“Bridging”には双方の努力と歩み寄りが不可欠であることを学びました。

他のセッションにおけるテーマとの繋がり

今年度のテーマに沿って、他のセッションは以下のようなさらに細かいテーマを設けました。

文化セッション

- 四地域における文化の相違点への理解と偏見や誤解とどう向き合うかについての深い議論
- 固定化概念と一般化志向、文化の違いをエンターテイメントとする是非について

歴史セッション

- 歴史がどのように編成され、伝えられるのかへの理解及び批判的思考の重要性
- 互いの考え方への違いの理由への理解とそれを踏まえた建設的な対話の経験

平和セッション

- 「平和」の自らの定義と日常的な対立の対処法の認識
- 自らの目的を達成しつつ他者との関係を維持させる平和的関係の構築

参加者主体の学び

セッション運営はオーガナイザー達が行うものの、日中青年会議では、会議の理念として「参加者が常に会議の中心であること」を掲げています。そのため、セッションのほとんどにおいて、バディーグループによるアクティビティが組み込まれている他、会議終盤には、プロジェクトセッションという企画や準備から実行まで全て参加者が担う新たなセッションも行われました。

プロジェクトセッション / Project Session

会議後半で行われたプロジェクトセッションでは、それまで議論などを一緒に行ったバディーグループを一度解体し、新たに別地域の参加者を混合したそれぞれ5,6人のグループで3つのセッションテーマに取り組みました。

3つのセッションテーマは、会議のテーマであるBridging ~Conversation Beyond Borders~の理念に対して文化・歴史・平和構築といった異なる角度からアプローチすることを目指し、開講されました。文化を切り口としたプロジェクトセッションのグループでは、多文化が自己の考えや価値観などに組み込まれた個人的な体験を共有し、共通点や相違点を見つけることを目指しました。歴史に関するセッショングループでは、日中関係や地域間交流など「境界線」を超えて共有された歴史に関するトピックを選び、他の参加者がそれらの歴史に興味を持てるようなアクティビティをデザインすることに取り組みました。そして、平和構築のグループでは、身近なところから平和を追求する手段としての、深く開かれた対話を切り口に、個人の経験や知識を共有しながら哲学的・倫理的な問いについて議論することを目指して、設計されました。

またこのセッションでは、それまでの文化・歴史・平和構築セッションで学んだ知識や視点を、実際にどう身近な事例や個人の経験に応用していけるかを軸に、グループごとにディスカッションし、それぞれのグループメンバーの興味に合わせながら比較的フレキシブルな形で発表を行いました。

結果として、3日間を通して参加者それぞれがディスカッションやプレゼンテーションの作成に主体的に関わり、グループごとに成果発表を行うことができました。実際の発表では、参加者同士が自身のアイデンティティに関して深い対話を行ったり、Kahootなどのアクティビティをプレゼンテーションに取り入れて他の参加者を巻き込むインタラクティブな工夫が見られました。また、日本語と中国語における文化的・歴史的な繋がりなどに着目したテーマを掘り下げるなど、多角的で興味深いアウトプットが各チームで行われました。

収支報告

収入の部

参加費		0
財団助成金		250,000
	双日国際交流財団	150,000
	東華教育文化交流財団	100,000
自己資金（前年度繰越金）		328,685
ウェブサイト費		11,355
利息		480
計		590,520

支出の部

運営費		42,872
	広告費	32,816
	印刷費	10,056
滞在費		333,150
交通費		144,038
来年度予算		70,460
計		590,520

おわりに

皆様のご支援とご協力を賜り、国際関係が悪化した中でも、2026年度日中青年会議をオンラインという形で無事に終了することができました。

私たち学生が、どこまでこのような対話の場を守れるのか。何度も困難に直面した一年でしたが、参加者が真剣に、活発に言葉を交わし、楽しそうに学びを深めている姿を画面越しに6日間見ることができ、これまでの葛藤と努力は全て価値があったのだと、報われた思いがしました。オンラインというこれまで誰も経験したことのない体制での開催でも、運営全員、常に新たなアイディアを出し合い、毎日新しいことを取り入れ、より良い、私たちが望む形の会議を届けることに貪欲であり続けました。

私たちのような、学生主体の草の根的な対話の場は、残念ながらとても簡単に国家間の情勢に左右されてしまいます。それでも強く、とても確かに、わかりあおうとすることをやめてはいけない、これまで熱い想いと大きな労力の元に何年も継がれてきた「場」という名の灯を絶やしてはいけないと思います。

オンラインでありながらも、それでも人々の温かさと活発な弾けんばかりのエネルギーのなかに、18年間愛されてきた「日中青年会議らしさ」が確かに存在しました。学生主体で運営されるこの会議は、例年、会議に必要な人材、資金、場所、また理解と支援を確保することが運営委員の大きな挑戦となります。目まぐるしく変わる世界情勢の中で、その挑戦は一層大きく、重くのしかかります。学生主体であるか否かに関わらず、同じような状況に置かれている交流プログラムは多いのではないのでしょうか。

挑戦の大きさは十分に承知の上で、来年度以降の対面開催の実現のため、私たちはこれからも走り続けます。このような情勢の中でも、第18回日中青年会議を届け、成功を収めることができましたのも、ひとえに皆様の温かいご支援とご協力のおかげです。これからも、平和と国際理解の礎を築く、その一歩目となる場を提供できますよう、情勢に柔軟に対応しながら更なるプログラムの向上を目指して参ります。

改めまして、長きにわたりご支援、ご協力をいただいております皆様に、この場を借りて深く御礼申し上げます。今後とも、日中青年会議を何卒よろしくお願い申し上げます。



2026年度日中青年会議委員会一同



発行・運営：2026年度 日中青年会議委員会

協力団体：



公益財団法人 双日国際交流財団

公益財団法人東華教育文化交流財団